

● 国土

マレーシアは全13州と3つの連邦直轄区(クアラルンプール、プトラジャヤ、ラブアン島)で構成される連邦国家。11州はマレー半島にあり、海を隔てたボルネオ島北部に2州(サバ、サラワク)がある。

● 面積

総面積は約33万㎡で、日本の約90%に相当する。

● 人口

約2880万人(2017年)。

● 首都

クアラルンプール(Kuala Lumpur)。地元の人々は略してKLと呼ぶ。人口は179万人(2017年)。

● 民族構成

人口の約68%がマレー人(先住民を含む)で、そのほか中国系が約24%、インド系が約7%の多民族国家。

● 言語

国語はマレー語だが、国民の多くは英語も理解し、幅広く使われている。ほかに中国系住民は福建語や広東語を、インド系住民はタミール語を話す。このため国民の多くがバイリンガルで複数の言語を話す。

● 宗教

国教はイスラム教。しかし宗教の自由が憲法で認められており、マレー人はイスラム教、中国系は仏教、インド系はヒンドゥー教を信仰。ほかにキリスト教徒もいる。

● 政体

ペナン、マラッカ、サバ、サラワク州以外の9州のスルタン(権威)が5年ごとに輪番で国王に就く立憲君主制。行政の中心となる首相は、二院制立法制度の議会により選出される。

● 歴史

14世紀末に興ったマラッカ王国が東西貿易の中継地として繁栄したが、16世紀以降は約4世紀にわたりポルトガル、オランダ、イギリスの欧州列強に支配される。太平洋戦争中は約3年半の間、日本の統治下にあった。その後、1957年8月31日にマラヤ連邦として独立。その後、1963年にシンガポール、サバ、サラワクが加わりマレーシアが形成された(シンガポールは1965年8月に分離独立)。

● 産業経済

かつてはスズやゴムなどの第一次産品の輸出が経済を支えていたが、1980年代には電気・電子機器産業が成長。90年代に入ると運輸、通信、金融、保険、不動産、観光といったサービス産業が発展。現在はGDPの約55%をサービス産業が占めている。日本との経済交流は活発で、日系企業の進出は約1400社(2016年)に及ぶ。

● 気候

年間を通じて気温は摂氏26度～33度。熱帯性気候に属し、年間降水量は平均2500mm程度。季節は雨季と乾季に分かれるが、マレー半島の西海岸と東海岸、またマレー半島とボルネオ島では雨季・乾季のタイミングが異なる。

● アクセス

日本とマレーシアを結ぶ直行便は、マレーシア航空(MH)、日本航空(JL)、全日空(NH)、エアアジアX(D7)が運航。

成田/クアラルンプールはMHが週12便、JLが週7便、NHが週7便を運航。

羽田/クアラルンプールはNHが週7便、D7が週7便を運航。

関空/クアラルンプールはMHが週7便、D7が週7便を運航。

成田/コタキナバルがMHが週2便を運航。

新千歳/クアラルンプールはD7が週4便を運航。

● 通貨

マレーシアの通貨単位はリンギット(RM)とセン(SEN)。1リンギット=100セン。1リンギットは約28円(2018年)。紙幣は100、50、20、10、5、2、1リンギット。コインは50、20、10、5セン。

● ビザ&パスポート

日本国籍で観光・商用目的の場合は90日以内の滞在はビザが不要。ただしパスポートの残存が入国時6カ月以上あることが条件。また、マレー半島からサバ州とサラワク州に入る場合は再度入国手続きが必要になる。日本以外の国籍を有する者の場合は、ビザが必要になる国もあるので確認を忘れずに。到着時のビザ取得は不可で、事前のビザ取得にも時間が掛かるので事前のチェックが必須。ビザが必要な場合は、シンガポールからジョホールバルへの短時間の一時入国も例外とはならないので、この点も注意が必要。ビザ取得が必要な国のリストは駐日マレーシア大使館ホームページに記載しているので参照のこと。

MALAYSIA MAP



マレーシア政府観光局

東京支局
〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-6-4 千代田ビル 5F
TEL 03-3501-8691 FAX 03-3501-8692

大阪支局
〒550-0004 大阪市西区靱本町1-8-2 コットンニッセイビル 10F
TEL 06-6444-1220 FAX 06-6444-1380

www.tourismmalaysia.or.jp/

発行2018年10月 ※本紙掲載の情報は2018年10月時点のものです。内容は予告なしに変更する場合があります。

Webサイトで
詳しい情報を紹介しています



MALAYSIA

School Trip & Education Guide

マレーシア教育旅行ガイド



マレーシアが 教育旅行に 適している理由

● 安心・安全な環境

マレーシアは東南アジアで最も経済、政治の安定した国の一つだ。深刻な民族対立や宗教対立はなく、むしろ複合民族・複合宗教国家のモデルとされるような平和な社会を築いている。経済的には貿易黒字は2017年まで20年連続。2017年のGDP成長率は5.9%に達している。失業率は3%台、物価上昇率も2%台と極めて健全なことや、農業振興に力を入れてきた国の施策により、農村が豊かなことも社会的な安定を支えている。

● 旅費・滞在費が割安

教育の一環として実施される旅行には、当然ながら経費に一定の制限がかかる。とくに全員参加型の海外修学旅行の場合は、公立校では費用制限が決められており、私立学校の場合も保護者の負担への配慮は欠かせない。その点、マレーシアは他国と比較してコストを全般的に低く抑えることが可能だ。旅費の多くを占める航空運賃も、距離が距離的に近いマレーシアは安く抑えることができる。

● 近くて時差も最小限

日本から首都クアラルンプールまでの所要時間は直行便で約7時間。時差は1時間だ。馴れない海外旅行でただでさえ身体的負担のかかる教育旅行参加者にとっては、無駄な体力消耗を抑え、現地での滞在を充実させるためにも、距離の近さや時差の小ささは重要な要素。親日国マレーシアの人々との心理的な距離も近く、学習環境という意味でも好ましい条件が整う。



● 英語環境が整う

英国が旧宗主国だったこともあり、マレーシアでは多くの国民が英語を理解する。英語は、国語であるマレー語と共に、第二言語に位置付けられており、英語教育のレベルも高い。スウェーデンの研究機関「Education First」の調査（2017年）では、マレーシアの英語力は世界第13位で、アジアではシンガポールに次ぎ2位となっている（ちなみに日本は37位）。各国からの留学生が多く、英語教育の専門機関を併設する高等教育機関も多数ある。

● 豊富な体験学習素材

世界最大級の熱帯雨林や長い海岸線、数多くの島々がさまざまな野生動植物を育むマレーシア。世界遺産の霊峰・キナバル山も有し、海拔0mのビーチから標高4000mまで多様な自然に触れられる。伝統的な生活を体験できるカンポン（村落）ステイの受け入れ態勢が整い、現地の学校も日本の学校との交流プログラムに積極的。

● ホテルやインフラの充実

マレーシアは外国人訪問者数が年間2600万人（17年）に達し、好調な経済成長に伴い国内旅行者数も急増している。このため空港、鉄道、道路といった観光・交通インフラの拡充が進み、世界的なホテル企業の進出もあって宿泊施設の設備・サービス面の進化も著しい。

マレーシア 旅行現地情報



服装

赤道付近にあり熱帯性気候のマレーシアには、日本の夏服を持っていくことになるが、建物や店舗の中は冷房が効いているので、半袖の上にはおる上衣を1着持っていくのがお勧め。

携帯品



日差しが強い時間帯があるので、帽子や日焼け止めは必ず持っていきたい。訪問する場所によっては虫除けスプレーの用意も。あると便利なのはウエットティッシュやティッシュペーパー。手を拭く以外にも、汗をかいた際に肌を拭いたり、食事の際に使用前のテーブルを拭いたり利用範囲は広い。携行品を入れるバックは、防犯上、ファスナーなどで口を留められるタイプが好ましい。またリュックタイプを持つ場合は、後ろに背負うのではなく前に抱えるのがお勧め。

水

水道水や生水は飲まない方が無難。飲用にはいったん煮沸した水か、ペットボトル入りのミネラルウォーターを飲むこと。



トイレ

都会のショッピングセンターやホテルでは日本と同様のトイレを使用できるが、場所によっては勝手が違うケースもある。マレーシアでは、紙を使わず水で流すのが伝統的なスタイルで、紙の用意がないトイレもあるのでティッシュペーパーは常に多めに用意しておくのが安心だ。

電圧

電圧は240ボルトでコンセントは3つ又タイプ。日本のデジタルカメラの充電器は240Vまで対応のものが多くので変圧器は不要だが、変換プラグは持っていくのが安心。



マナー

握手：握手はマレーシアでも一般的な挨拶方法だが、相手がイスラム教徒の場合は注意点もある。まず女性が男性に挨拶するときは、笑顔で軽く頭を下げる程度が一般的。男性は、女性から手を差し出した時だけ握手で応え、自分から握手を求めないのがマナー。また握手の際には必ず右手を使い、絶対に左手を出さないこと。左手は「不浄の手」とされており、差し出せばマナー違反になる。モスク訪問：イスラム教の寺院であるモスクを訪れる際には、そこが神聖な場所であることを忘れずに。特別に見学が許可されているモスクでも、神聖な場所に対する敬意と配慮が必要。まず、必ず靴を脱ぐこと。また女性は肌が露出しない服装を心掛け、必要場合はローブやスカーフを身にまとうこと。男性も半ズボンの場合はローブで肌を隠すこと。見学できるモスクではローブの貸し出しを行っている。訪問：一般の家庭を訪問する際にも、日本と同様に玄関で靴を脱ぐ習慣がある。



お小遣い

マレーシアの物価は全体的に日本より安いので、お小遣いも物価に合わせて検討するのがいい。ミネラルウォーター（500ml）は大体2リンギット（50～60円）で手に入る。クアラルンプールにはスターバックスも多数あるが、おおよそ日本の2割安程度の価格。街中のフードコートでは麺などの単品を200円程度で食べることができ、日本の半額程度と考えていい。

インターネット

インターネット回線はホテルに備え付けられていることが多いが、有料の場合もあるので要注意。

ビジネスアワー

一般の商店は平日が9:00～19:00。日曜は休日。デパートやショッピングセンターは11:00～21:00頃で、年中無休も多い。公共機関は月～木が8:00～12:45/14:00～16:15。金曜は8:00～12:15/14:45～16:15。土曜は8:00～12:45。日曜・祝日は休日（土曜が休日のこともある。またマレー半島東海岸では州によって金曜が休日になる）



Webサイトで
詳しい情報を
紹介しています

マレーシアの 教育旅行素材

マレーシアにはテーマの異なるさまざまな体験学習素材がある。文化の多様性を身をもって感じることができるのは、多民族がそれぞれの文化・宗教を保ちつつ、互いに敬意を払う多民族国家のマレーシアならではの。また世界有数の熱帯雨林をはじめとする貴重な大自然に触れるチャンスがあるマレーシアでは、環境学習にうってつけの自然体験もできる。英語が広く使われている為、自分の英語力を実践する良い機会にもなる。

異文化交流

学校交流

マレーシアの教育旅行において最も人気が高く、実施校の満足度も高いプログラムが現地学校への訪問交流だ。国は違えども同年代同士ならば共通の話題も多く、打ち解けるのも早い。いったんリラックスできればコミュニケーションもはかどり、片言の英語であっても意思疎通する楽しさを体感できる。インターネットの普及により、近年は訪問前からメールで生徒同士がやり取りし、現地で対面するというケースも増えている。

マレーシアの教育省は学校交流の受け入れに積極的で、現地交流校を探す際の支援を受けられる。ただし交流時期には一定の制約がある。公立私立共に10月～11月は試験期間で、12月中は休暇期間となる。このため原則的には10月～1月上旬までは学校訪問ができないことになる。

●教育省連絡先
Ministry of Education
Policy and International Relations Division
Aras 7, Blok E8, Kompleks E,
Pusat Pentadbiran Kerajaan Persekutuan,
62604 Putrajaya
Malaysia
Tel: 603-8884-6109 Fax: 603-88895473



ブラザー&シスター・プログラム

日本語を学ぶ現地の大学生が、生徒たちの活動に同行、案内してくれるのがブラザー&シスター・プログラム(B&Sプログラム)。一般的なケースでは、日本の生徒6～8名のグループに対して1名の現地大学生が同行する。活動の対象エリアは首都クアラルンプール(KL)が中心となり、KL滞在中の班別行動のプログラムとして人気が高い。内容は実施校により様々だが、たとえば大学生の案内でKL市内を観光したり、街なかのフードコートで一緒に食事をしたりとできる。現地大学生と行動を共にしながら、自然な形で英会話を交わし、実践的な英語のコミュニケーション能力を鍛えることができる。

カンポンスティ/ビジット

マレー語で「村」を意味するカンポン。カンポンスティ/ビジットはマレーシアならではのホームステイの形で、郊外の一般家庭に滞在/訪問し、人々の日常生活とその土地の文化習慣に直接触れる異文化体験プログラムだ。宿泊と訪問の二通りのパターンがある。

現在、マレーシア観光芸術文化省が定める基準をクリアしたカンポンスティ可能な場所が全国に209地域、宿泊が可能な村が357村。宿泊または訪問可能な家庭は4025軒、部屋数は5650室ある(いずれも2018年3月31日時点)。一定の基準をクリアした家庭、村のみ受け入れ可能な為、衛生面でも安心だ。

2017年には全世界から6万1846人を受け入れている。日本からは2018年1月～3月だけで2890人の日本人がマレーシアでカンポンスティもしくはステイを体験しており、これは韓国に次いで2番目に多い。



街歩き

教育旅行の中で、生徒たちだけの街歩き体験に挑戦できるのは、治安の良いマレーシアの強みの一つだ。B&Sプログラムを活用すれば現地大学生が案内してくれるので、より安心だ。街歩きをすれば生徒自身が多くの発見に遭遇し学習テーマにつなげることもできる。たとえば「マクドナルド」に、イスラム教徒でも食べられる食材を使ったハンバーガーが売られていることから、食を通じて多民族共存のリアルな実態を学ぶこともできる。



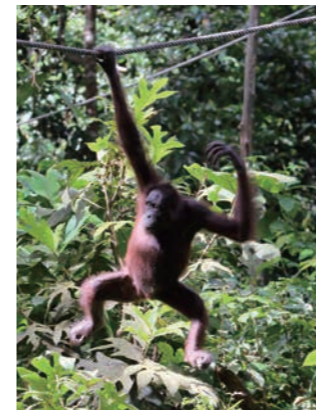
自然学習

植樹プログラム



マレーシアでは環境保護や景観維持を目的とする植樹活動「Plant Tree Program (PAT)」を実施しており、ホームステイが可能なすべての地域でPATに参加できる。ホームステイ中にボランティアとしてPATプログラムに参加し植樹を体験することで、生徒たちは自然保護について考えるきっかけを得られる。またマレーシアの自然環境保護に貢献したという実感も、生徒にとっての財産となるはずだ。

自然保護活動ボランティア



マレーシアでは植樹に限らずさまざまな自然保護活動のボランティアに参加可能で、教育旅行向けのプログラムも多数用意されている。

たとえば絶滅危惧種、オランウータンの保護活動で知られる、サバ州のセピロック・オランウータン・リハビリテーション・センターでは、オランウータンの行動記録作成

の手伝いや、施設内の清掃作業の手伝いなどを体験できる。サラワク州のマタン・ワイルドライフ・センターでも動物の行動観察記録を手伝うプログラムがある。

ボルネオ島のサバ州やサラワク州まで行かなくても、クアラルンプール近郊のマレーシア国立動物園(ズー・ネガラ)では、飼育係の一部作業を体験できるプログラムがある。ただし16歳以上の年齢限定プログラムとなっている。詳しくはwww.zoonegaramalaysia.myを参照。

キャノピーウォーク(森林体験)

地上40m、ビルの10階に相当する高さから樹木を間近に観察できるのがキャノピーウォークだ。樹と樹の間を空中でつなぐ吊り橋状のキャノピーウォーク体験はスリリングでアトラクションとしても楽しめる。

クアラルンプール中心部のKLタワー麓に広がるKLエコフォレストパークは、マレーシアでも最古の自然保護区の一つでここでもキャノピーウォーク体験が出来る。

都会のど真ん中にいながら手つかずの自然を感じられるのはマレーシアならではの。

このほか、コタキナバルのポーリン温泉や、ペナン島のペナンヒル、マレー半島中央部のタマンヌガラ国立公園、サラワク州のグヌン・ムル国立公園でもキャノピーウォークを体験できる。





Webサイトで
詳しい情報を
紹介しています

▶ 歴史・文化体験

モスク見学

多民族国家マレーシアで多文化の共存を実感できる素材の一つが宗教建築。街なかでは仏教寺院やキリスト教会、ヒンドゥー教寺院など、さまざまな宗教建築を見学できる。なかでも日本ではあまり馴染みのないイスラム教モスクの見学は、異文化を学ぶ上でお勧めの体験素材だ。イスラム教を国教とするマレーシアは日本から一番近いイスラム教国で、どの町にも必ずモスクがあり、建築技術の粋を凝らし、美しいイスラムアートを施した壮麗なモスクは、建築や美術の観点からも見応えがある。また地域によりマラッカのスマトラ様式、ジョージタウンのアチェ様式などの違いがあり、さらにいずれとも異なるインド系イスラムのムガール様式のモスクを見ることもでき、モスクがその土地の歴史や文化を色濃く物語る存在であることを学べる。



多民族国家マレーシアで多文化の共存を実感できる素材の一つが宗教建築。街なかでは仏教寺院やキリスト教会、ヒンドゥー教寺院など、さまざまな宗教建築を見学できる。なかでも日本ではあまり馴染みのないイスラム教モスクの見学は、異文化を学ぶ上でお勧めの体験素材だ。イスラム教を国教とするマレーシアは日本から一番近いイスラム教国で、どの町にも必ずモスクがあり、建築技術の粋を凝らし、美しいイスラムアートを施した壮麗なモスクは、建築や美術の観点からも見応えがある。また地域によりマラッカのスマトラ様式、ジョージタウンのアチェ様式などの違いがあり、さらにいずれとも異なるインド系イスラムのムガール様式のモスクを見ることもでき、モスクがその土地の歴史や文化を色濃く物語る存在であることを学べる。

バティック体験



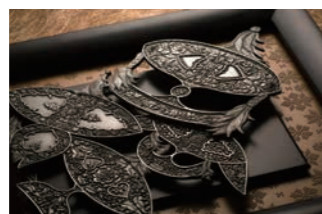
マレーシアの伝統的な染色技術であるバティック（ろうけつ染め）の体験学習を通じ、伝統文化の力を理解できる。生徒の好きな絵や文字を染色し、オリジナルの染め物を制作。そのまま持ち帰るか、後日、日本へ送ってもらうこともできる。クアラルンプールの他、ペナン島やジョホールでも体験可能。

【体験可能都市】

●クアラルンプール ●ペナン島 ●ジョホールバル

ピューター工場見学

ピューターとはマレーシアの特産である錫（スズ）を主成分とした合金。クアラルンプールとペナン島にある世界的メーカー「ロイヤルセランゴール社」のビジターセンターでは製作過程が見学できるほか、ピューターの加工体験もできる。



またジョホールバルの文化村でもピューターの加工体験が可能。同文化村ではバティック体験やゴムの樹液採取も体験できる。

【体験可能都市】

●クアラルンプール ●ペナン島 ●ジョホールバル

国立博物館／イスラム美術博物館

マレーシア国立博物館では、マレーシアの歴史・文化を総合的、体系的に学ぶことができる。KLセントラル駅から徒歩10分というロケーションの良さも特徴。毎週火・木・土の朝10時から、



ボランティアによる日本語案内付きの博物館ツアーを実施。イスラム美術館は、イスラム文化を学ぶのに最適な施設。建築ギャラリーには、世界各地の有名イスラム建築のミニチュアが展示されており、居ながらにしてイスラム建築に関する理解を深めることができる。

世界文化遺産（マラッカ、ジョージタウン）



マラッカとジョージタウンは、マラッカ海峡の古都群として街の一部が世界文化遺産に登録されている。

マラッカでは東西貿易の中継点として繁栄した歴史を学べるだけでなく、欧州列強に支配された歴史が織りなす複雑な文化の形成過程を振り返ることができる。またジョージタウンには英国植民地時代のコロニアル調の建築や史跡が数多く残るだけでなく、マレー式、中国式、インド式などの建築物も混在しており、貿易や文化の交差点として繁栄した過去の歴史をしのぶことができる。

マーメリ族文化村

クアラルンプールから車で約1時間、港町ポートクランの南にあるケリーアイランドには、少数民族のマーメリ族が住む。彼らの文化や風習を学



び、体験できる施設がマーメリ族文化村。35人以上のグループなら、マーメリ族に伝わる仮面踊りの鑑賞や模擬結婚式の体験、独特な折り紙作り体験等とランチを組み合わせた5時間のパッケージを利用できる。10人以下の小グループには、仮面や折り紙作りを体験するプログラムも用意されている。

●Mah Meri Cultural Village
<http://mmcv.org.my>

▶ 産業視察

日系企業視察



日系企業が1400社以上も進出しているマレーシア。教育旅行の受入に理解のある日系企業もあり会社訪問も可能だ。マレーシアをはじめとする東南アジアのダイナミックな成長と急速に進むグローバル化を日々体験している日本人ビジネスマンから、直接生の声を聞くことで、生徒たちは大きな刺激を受け国際感覚を磨ききっかけをつかむことができるはずだ。同時に国際舞台で活躍する将来の自分の姿をイメージすることにもつながる。

チームビルディング

協調性やコミュニケーション力、リーダーシップなどを鍛えるチームビルディングを教育旅行に取り入れるケースが増えている。マレーシアでプログラムを用意しているのがペナン島にあるアスレチック主体のテーマパーク「エスケープ」。所要時間はランチを含む8時間。（最少人数は要問合せ。）クアラルンプール郊外のウォーターパーク「サンウェイラグーン」もランチ込みのチームビルディング・パッケージを用意しており30名から利用できる。（所要時間は要問合せ。）



●ESCAPE（ペナン島） www.escape.my
●Sunway Lagoon <https://sunwaylagoon.com>

日本大使館見学

日本の在外公館も教育旅行を受け入れている。事前の調整は必要だが、大使館側が訪問の目的や内容を認めれば館内を見学できる。大使館職員が仕事の内容を説明してくれたり、海外での生活体験に関する生徒たちからの質問に答えてくれたりする場合もある。

▶ テーマパーク

キッズニア（クアラルンプール）



子供のための職業体験テーマパーク「キッズニア」は日本でも人気だが、クアラルンプールにある「キッズニア」の使用言語は英語であり、英語を学ぶ機会として活用できる。90のアトラクションがあり、約60種の職業を体験可能。施設利用の対象年齢は4歳～17歳のため高校生の教育旅行にも利用できる。学校対象のスクール・プログラムには生徒10名につき引率者1名の無料特典あり。

●KidZania
www.kidzania.com.my

デサルコースト・アドベンチャー・ウォーターパーク

ジョホール州の東海岸に18年7月にオープンしたばかりの世界最大級のウォーター・テーマパーク。人工波を楽しめる施設としては東南アジア最大のプールや、ウォーターコースターをはじめとするスプラッシュ系の乗り物、陸上の絶叫マシンなど20種類ものアトラクションが楽しめる。ファミリー向けのキッズゾーンなど5つのゾーンに分かれており、目的に合わせてエリアを選択できる。

●Desaru Coast Adventure Waterpark
<https://desarucoast.com>

ミニ留学で 学生のタフネスを養う

10年前から一貫してマレーシアへ

「確かな職業実践技術を持った社会人を育てる」ことを教育目的に掲げ、コンピュータやデザイン、ゲーム関係および建築関係の企業に多くの人材を輩出する国際理工情報デザイン専門学校。同校は10年前からマレーシアへのミニ留学を実施している。

そのきっかけは、ある業界団体の会合で竹井透校長が耳にした嘆きの声だった。「最近若い社員が心弱く、ストレスに強い人材が欲しいのだが・・・」という経営者の声を聞き、「学生たちを未知の環境である海外に送り込んでタフネスを養う」（竹井校長）ことを思いつく。



竹井校長には日本企業のマレーシア駐在員の友人がいたこともあって、自らも渡航経験が豊富で、発展するアジア経済の中心に位置するマレーシアのダイナミックな成長ぶりや、多民族による異文化共生がもたらす価値、親日的で治安の良い社会、マレー語だけでなく英語や中国語が普通に話されているインターナショナルな言語環境については熟知していた。そこで留学先としてマレーシアに白羽の矢を立てた。

当初の5年間は、1年次の必修科目として全員参加による1カ月間のミニ留学を実施し、5年間で約1000人がマレーシアでのミニ留学を体験した。しかし、海外での留学生活にどうしても馴染めない学生も一定数存在したため、2014年からは1年次の選択科目「国際コミュニケーション」（2単位）に切り替えたうえで、期間を約2週間に短縮して実施する形に

変更。またミニ留学の費用約16万円のうち約6万円は学校から給付し、残りの10万円は奨学金として貸与する制度を用意し、希望者の中から選抜試験により24～28名の留学生を選考することにした。

現地ではクアラルンプール市内のホテルに滞在し、現地のUTAR大学を訪れてカレッジ交流し、4人1組の班別グループワークも実施。18年度のグループワークでは、たとえば建築設計科の班が「マレーシアの商業建築物の内外装の特徴研究」、ビジュアルデザイン科の班が「マレーシアの伝統的民族衣装の研究」などをテーマに取り上げた。このほかミニ留学中にはマラッカに移動して2泊3日のカンポン・ホームステイも体験する。

ミニ留学の教育効果をより確かなものにするため、英会話のレッスンを含み事前学習を6回、グループワークの研究結果の発表会を含めた事後学習も5回行っている。

マレーシア・ミニ留学の成果は、学生たちの自信となって現れているという。見ず知らずの海外で約2週間生活し、言語も習慣も違う人々と交流することで得る自信は大きい。竹井校長は「ミニ留学での経験を堂々と自己PRができることで、就職活動にも大いに役立っているようだ」と成果を語る。国際理工情報デザイン専門学校では、教育効果の高いマレーシア・ミニ留学を今後も続けていく方針だ。



ミニ留学スケジュール（2018年）

1日目	成田発/クアラルンプール (KL) 到着
2日目～5日目	フィールド研修 (グループワーク)
6日目	UTAR大学にてカレッジ交流
7日目	マラッカへ移動してホームステイ
8日目	ホームステイ
9日目	ホームステイ先に別れを告げてKLへ移動
10日目	授業 (グループワーク)
11日目	自由行動/夜の便でKL発
12日目	成田到着



変更。またミニ留学の費用約16万円のうち約6万円は学校から給付し、残りの10万円は奨学金として貸与する制度を用意し、希望者の中から選抜試験により24～28名の留学生を選考することにした。

世界と共に生きる 人間形成へ

マレーシアで異文化への理解力を鍛える

女性を対象に中・高一貫教育を行ってきた啓明女学院が、2002年に関西大学との継続教育協定を締結。中・高・大の10年一貫教育を行う男女共学校「啓明学院」として生まれ変わり、2002年に中学校、2005年には高等学校がスタートした。

同校では男女共学化の節目に教育内容や学校行事を見直し、高校2年で実施する修学旅行も内容を一新することになった。修学旅行内容の見直しの重要な柱の一つが国際理解教育の充実だった。そこで、女学院時代に長年にわたり行ってきた北海道修学旅行を海外修学旅行に切り替えることになり、候補地を絞り込んだ結果、選ばれたのがマレーシアで、2010年から一貫してマレーシア修学旅行を実施している。



マレーシアが選ばれた理由の一つは、日本では経験できない陸路での国境越えが、マレーシアからシンガポールへ入国することで体験できることだ。「国境」を強く意識することが、「国際理解の出発点となる国境について生徒が考えるきっかけになればと考えた」（長久善樹・社会科教諭）。修学旅行のような多人数が陸路で安定して国境越えできる場所は決して多くはない。その他、治安、衛生、インフラ、教育素材といった条件もクリアできる目的地となれば、なおさら候補は絞られる。マレーシアはこれら条件に合致できる数少ない目的地だ。

また「これからの時代に世界と共に生きていく若者たちは、異文化への理解力を養うことが必要で、そうした力を鍛える場所としてマレーシアが最適だった」（長久教諭）ことも重要な理由だった。

マレー系、中国系、インド系などが共生する多民族国家、マレーシアはまた、イスラム教、キリスト教、仏教などが共



マレーシア・シンガポール修学旅行スケジュール（2017年）

1日目	関空発/クアラルンプール (KL) 到着
2日目	午前：クアラルンプール市内のブルーモスクを見学 午後：バングリヌス村ホームビジット
3日目	朝：KLからバスでマラッカへ移動 到着後、プラナカン体験散歩、マラッカ見学をして昼食 その後はジョホールバルへ移動し夕食後、陸路で国境を越えてシンガポールへ
4日目	シンガポール
5日目	シンガポールから再びマレーシアへ移動し夜便で出発
6日目	関空到着



存する多宗教国家でもある。とくに日本社会に馴染みのないイスラム教に触れられる点でマレーシアは「馴染みのない文化に対して抱きがちな偏見や、関心の薄さを克服し、柔軟な思考と感性を鍛えるのにも適した場所だ」と判断した。さらに成長著しい東南アジアの中でも最も勢いがあるマレーシアの経済的なダイナミズムを体感できることも評価した。キリスト教を建学の精神とする啓明学院にとっては、マラッカのキリスト教建築や遺跡も魅力のポイントだった。

生徒の中には帰国子女も多く、海外駐在を通して東南アジアの実態を知る保護者が多いため、修学旅行先としてのマレーシアの高い評価も父兄と共有しやすいという。

毎年、高校2年生が約240名参加しており、2班に分けて実施している。本来は全体での実施が望ましいが、航空座席確保の面で2便に分けている。3分割は修学旅行として望ましい形でないため、今後、生徒数が増えた場合も2分割までに収めて実施できるかが心配の種だという。ただし当面は目的地をマレーシアから変える考えはないとのことだ。

モデルコース MODEL COURSE



基本コース4日間

1日目	日本発▶クアラルンプールへ	クアラルンプール泊
2日目	午前 クアラルンプール市内見学 モスク、国立博物館 ツインタワー等 夕方 蜚見学	クアラルンプール泊
3日目	学校交流またはカンボンビジット	クアラルンプール泊
4日目	クアラルンプール発▶日本へ	

歴史と文化を学ぶ5日間

1日目	日本発▶クアラルンプールへ	クアラルンプール泊
2日目	午前 クアラルンプール市内見学 モスク、国立博物館 ツインタワー等 午後 ビューター作り体験 パツケーブ見学	クアラルンプール泊
3日目	マラッカ1日見学	マラッカ泊
4日目	カンボンビジット 夜 クアラルンプール▶日本へ	機中泊
5日目	日本着	

自然体験と団結力を高める5日間

1日目	日本発▶(乗継)▶ベナン島へ	ベナン島泊
2日目	午前 ジョージタウン (世界遺産)見学 午後 チームビルディング	ベナン島泊
3日目	学校訪問またはカンボンビジット	ベナン島泊
4日目	ベナンヒルで ネイチャートレイル体験 夕方 ベナン▶(乗継)▶日本へ	機中泊
5日目	日本着	

国境を超える5日間

1日目	日本発▶シンガポール シンガポール▶国境を越えて ジョホールバルへ	ジョホールバル泊
2日目	学校訪問またはカンボンビジット	ジョホールバル泊
3日目	午前 レゴランド見学 午後 パティック体験 伝統文化体験	ジョホールバル泊
4日目	朝 ジョホールバル▶国境を越え シンガポールへ シンガポール市内見学 夜 シンガポール▶日本へ	機中泊
5日目	日本着	

短期留学&サマースクール

マレーシアの大学はアジアトップレベルの英語力を誇り、ほぼ100%英語での授業が行われている。学費は年間約80万円前後で生活費は月5、6万円と、欧米諸国と比較して費用負担が軽いことも手伝って、留学生からの人気も高まっている。また欧米の大学と提携する大学が多いため、マレーシアの大学から欧米の大学への編入制度も充実していることも人気要因の一つだ。留学生の誘致には各大学とも力を入れており、日本や韓国といった東アジアや近隣の東南アジアをはじめ、中東やアフリカ、さらには英語圏以外のヨーロッパの国々からも留学生が多数マレーシアで学んでいる。

こうした留学性の受け入れ基盤があ

るため、夏休みや春休みの期間を利用して、本格的な留学前に短期留学(3カ月未満)で海外体験をしてみたい大学生向けの語学コースもある。またサマースクール等の形で1週間~1カ月程度の語学研修を受けたい高校生にとってもマレーシアは最適な受入環境を用意できる。

英語教育と外国人の受け入れに豊富な実績がある ELC (English



Language Company) などの語学研修機関もサマースクールやウィンターキャンプを実施し、短期間の語学研修を行っている。

●ELC www.elcmy.edu.my

留学の5ステップ EMGSがサポート

マレーシアに本格的に長期で留学するためには学生ビザの取得が必要で、大きく分けて5段階のステップを踏むことが必要となる。まずは学生側が自らの希望・学びの方向性を明確にする必要がある。マレーシアには大学やカレッジのほか、実践的なスキルを身に付けるための専門学校、英語を中心とする語学研修が目的の語学学校等多くの教育機関がある。そのうち、何を目的にどのような分野について学ぶのかを決めるのが大前提となる。

そのうえで、第1段階として数ある教育機関のうちのどの大学、学校のど

んな教育コースを履修するのかを決めて教育機関側に申請。入学・入校の許可を受けるのがスタートだ。

第2段階では学生としてマレーシアに入国・滞在するための学生ビザを取得する手続きを始める。学生ビザの申請は、受入学校側がマレーシア教育省に対して行う。このため受入学校側に必要書類を送ることになる。申請が認められればマレーシア教育省が「学生ビザ承認レター」を発行し、受入学校を経由して学生に届けられる。

なお2017年10月からは「学生ビザ承認レター」が電子レター化されたため

ビザでマレーシアに入国することになる。

第3段階はマレーシアへの渡航手続きと航空券等の手配。第4段階はマレーシアへの入国となる。入国手続きはシングルエントリービザで行うことになる。

最終の第5段階では、マレーシア入国後に指定された医療機関で健康診断を受け、問題がなければ受入学校を通じてパスポートを教育省に提出し学生ビザを交付してもらう。

以前より手続き期間が短縮されたとはいえ、日本出発前に必要となる手続きには時間が必要なので十分な時間的余裕を持って進めることが求められる。

なおマレーシアには教育省の傘下組織として Education Malaysia Global Services (EMGS) があり、マレーシア留学に必要な教育機関や語学学校等の情報提供や、学生ビザ取得手続きのサポートなど、留学生サービスのワンストップセンターとしての機能を果たしている。

●EMGS
www.educationmalaysia.gov.my



MALAYSIA 修学旅行ハンドブック



B5判 カラー36ページ

INFORMATION

マレーシア修学旅行ハンドブック

国の概要や文化・宗教・歴史のほか、政治経済、産業の情報など、修学旅行の渡航先としてマレーシアを深く知るための生徒の事前学習用ハンドブックです。

対象 事前学習用の為、既にマレーシアへの修学旅行が決定しており、首都・クアラルンプールに1泊以上滞在する学校の生徒。

請求方法 実施期間の1年~3ヶ月前までに、学校長または修学旅行担当者より日程表を添付の上、専用紙にてFAX/郵送でお申し込みください。
※旅行会社の方からの請求は承っておりません。ご了承ください。